

世界を 体感

豪州でスポーツ研修

NACK5高校生海外スポーツ研修プログラム

語学が苦手だと「留学なんてありえない!」と思いませんか? コミュニケーションの手段は言葉だけではありません。この夏、FM NACK5の協力を得て、埼玉県のみならずオーストラリア・クィーンズランド州へ高校生8名を派遣します。研修先はオリンピック選手などもトレーニングを行うスポーツスーパーセンター。さまざまなスポーツトレーニングを通じて、スポーツにおけるリーダーシップや協調性を学びます。また、クィーンズランド州立高校を訪問し、現地の高校生とスポーツを通じたコミュニケーションを図る機会も予定されています。



海外への大学 などへの留学

「埼玉発世界 行き」奨学生

埼玉県では、平成23年度から「埼玉発世界行き」奨学金制度を設け、グローバルな活躍を目指す日本人学生に対して給付型の留学奨学金を支給しています。これまでに約1,000人を43か国に送り出していて、全国トップクラスの規模を誇ります。

先輩から

新井 俊介 さん

平成25年度協定・認定留学コースで
INALCO(フランス国立東洋言語文化研究所)
(フランス)に一年間留学

フランスでの生活の中で、周りの目を気にせずしっかりと個人の意見や権利を主張するフランス人の姿勢から多くのものを学びました。対して日本人は、一般に「意思や主張が弱い」と見られがちです。しかしそれは、他者の考えや気持ちを上手に汲み取る「察する文化」によるもので、誇れる「日本人らしさ」の一つだということにも気づくことができました。また留学を通して、「自分の中の思い込みをしないこと」「必ずしもそうではない」という考えを常に持つこと」の重要性を改めて実感しました。この経験は、今後の人生の中で必ず大きな意味を持つと思っています。

田島 祐美 さん

平成26年度協定・認定留学コースで
西オレゴン大学(アメリカ)に
7か月留学

留学前は、アメリカで出会うすべての人が異なる人たちだと捉えていましたが、英語力がつき、スムーズに会話ができるようになると、日本人もアメリカ人も大きな違いはないことに気づきました。もちろん文化の違いはありますが、考えているのは将来のことや家族・友人のことでした。

アメリカ人はこうだ、と一括りにして決めつけるのではなく、日本人と同様に様々な考えを持つ人がいるということ、私たちは同じ地球に暮らす人間だということが分かり、視野が広がりました。

埼玉で疑似留学

グローバルキャンプ埼玉

国際資格を持つネイティブスピーカーから英語でのコミュニケーションやディスカッション、プレゼンテーション技術を学びます。1クラス約15名程度の少人数クラス。他にも茶道などの日本文化体験や大学レベルの講義を英語で行います。また、環境や福祉、埼玉にゆかりのあるテーマなどのプレゼンテーションも行います。

留学に興味はあるけれど、時間・お金の制約があり難しい方、留学が決まったけれど、現地の授業についていけるか不安な方に最適なプログラムです。



川口市立県陽高校
英語教諭 古山 三保 先生



埼玉にゆかりがあり、グローバル社会で活躍している人を紹介するシリーズ「埼玉のグローバルさん」。今回は、川口市立県陽高校の英語教諭で、国際理解や開発教育*を授業に取り入れている古山 三保先生にインタビューしました。

*開発教育…共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加するための教育

国際理解や開発教育を行うようになったきっかけは何でしょうか?

10年以上前になりますが、当時在籍していた学校にJICA(国際協力機構)の元青年海外協力隊員が臨時採用教員として赴任しました。その頃英語の教科書にも途上国や国際協力に関する題材が入るようになり、徐々に、「私も海外で国際協力に携わる仕事をしてみたい。」と思うようになり、JICAボランティアの説明会に行ってみたりもしましたが、残念ながら当時は自分にできる職種はありませんでした。でもふと思ったのです。「自分自身は途上国で働くことはできなくても、途上国のために働く人間を育てることはできる」と。その後、埼玉県国際交流協会主催の「開発教育指導者セミナー」に参加し、子どもの頃から世界の現状を知って気づき考えること、自

分にできることを実行していくことが同じ地球に住む人間としてとても大切だと再認識し、授業に取り入れようと思いました。

授業を行って生徒たちの反応はどうでしたか?

「現場を知らなければ生徒たちに伝えきれない」と思い、参加したJICA主催のベトナムへの教師海外研修をきっかけにクラスの道徳や特別活動の授業で半年に渡って初めて開発教育の実践をしました。時には埼玉在住の外国人や国際協力NGOの方等にも来ていただく中、授業を重ねるほどに生徒たちはいろいろなことに気づき、考えるようになりました。そして最後の授業で、「ベトナムやラオスは貧しいかもしれないけど、笑顔がたくさんある。日本は便利で物があふれているけどそれで幸せと言えるのか?」と生徒自ら本当の豊かさとは何な

のかを考えるようになったり、また、途上国で足りていない部分に対して自分達にできることを考えるようになっていました。他にも多くの気づき、学び、心や態度の変容があり、開発教育の必要性、可能性を実感した1年となりました。

その後は、「英語を学ぶことは世界を学ぶこと」と繰り返しながら、英語の授業の中に組み込んで行っています。

生徒たちにはどのような大人になってほしいとお考えですか?

大きな事はできなくても日頃の生活の中で少しでも途上国に思いを馳せ、自分にできることを考え、行動できる人間になってほしいと思っています。そして、できれば世界に飛び出し、世界の人のために活動する生徒が出てくれるとうれしいです。